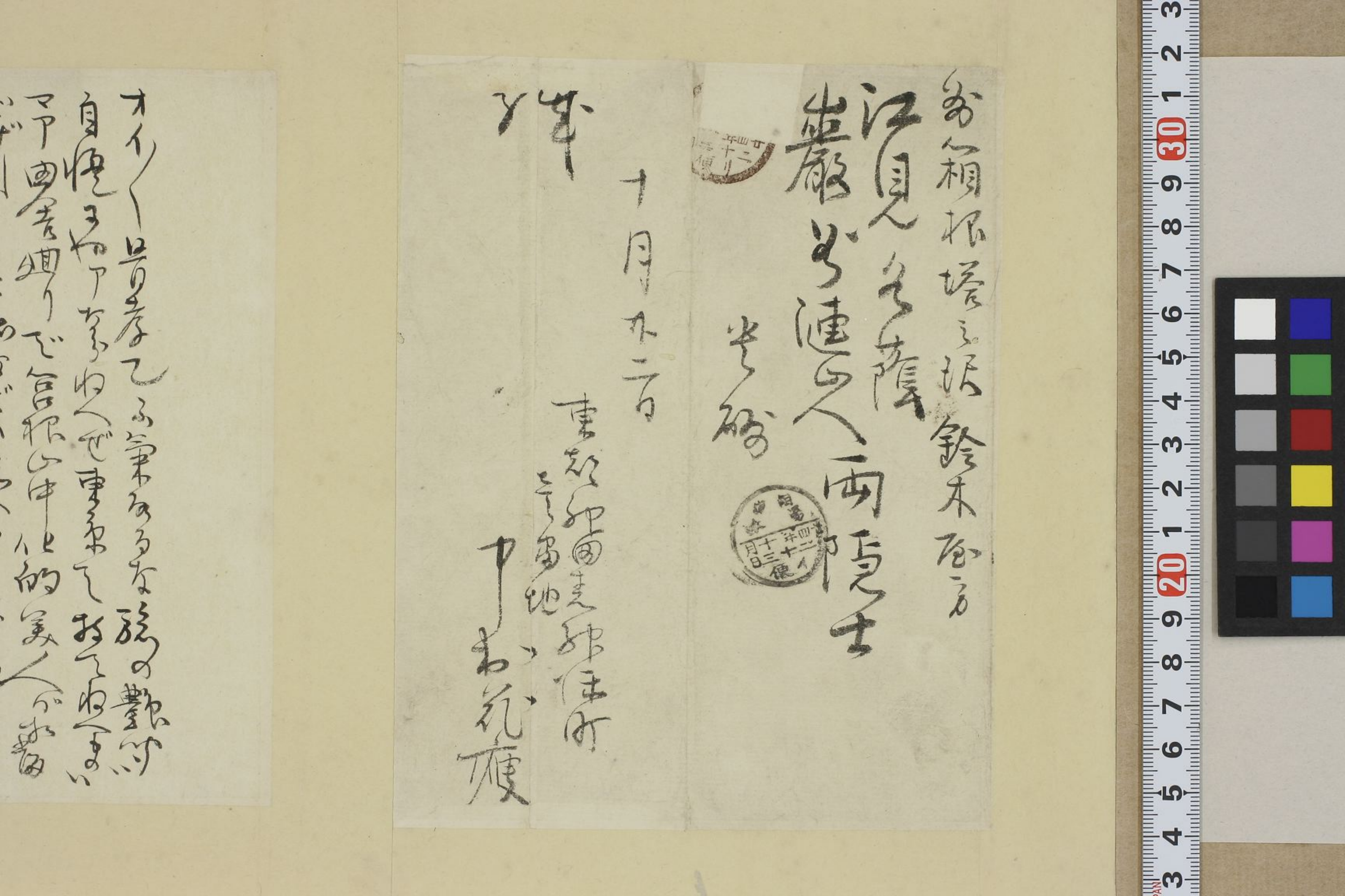

為替相場ニ付鈴木屋方
江戸ヘ金壱両送
厳密ニ連名人ヘ
渡ス

明治四十二年十月十三日 郵便

明治四十二年十月十三日 郵便

十月十二日

書翰面表紙住所
之通地

中村花渡

オイ〳〵昔考てふ事なる所の數学
自慢ヲ知アなゆめで事なてゆえまい
マア四書通りで官報ハ中止的実ハ
ガ出番

オイ〳〵昔考てふ事なる旅の數〻
自慢まわアなるぬ〳〵で事あて
マア四書通りで官報ハ中止的実〳〵が
でげーどうよ他なぞハ旅〳〵ふ〳〵
海どろの髪髪ーらで一度とふ歩りけ
ませんオホン女の足ハ恐るものでげすよ、
印景色ののろけ〳〵抑も塔の沢と、ぽ印
なぐ書きもでおとらすな淫信前みあ旅
聖侯ありこゝゝゝそれがわんとうなる
いっぱーとかぶげの景色ハ国でハ
すぐ〳〵よろしいたこの雲姫の考をす
ーらみ見るなどふ却而てで景〳〵
酒あり着あり美姫あり河ありそんなもの
今〳〵まもあるる目ぐらでね子情
婦まはのあるりうッのがわらい旅がが
知るものでで情婦ふ印旅でとらて
又ちっ友〳〵まれ津ふ〳〵あると信ふ
がおりーいこまん〳〵大のあ〳〵とうみて今わ
ふき見るとあううあそうに景印も
霊体和尚の側ふ何て〳〵ふ〳〵ふ
和除りでもいまよりよ愉快〳〵
などゝ知りてそんで戻るふ霊がね〳〵ス
エート和尚ふ〳〵ふ世は少て接てなるで〳〵
おるるすえなーでと遣〳〵ね〳〵知て

お繕りでもいたしますから愉快い(ス
なぞと捫りて来んで居るうち覚がね
エートー雲汁に世は(ゞ)いすて捨てたふとにに
おまへさんす文なし(で)と嘆(よく知つて
居らア(めくるう)ゐが御の一件でゞ(く
なに錯覚ましーて居るね(お頭けゆ連中
が錯(ご)やいし此の馬鹿めらもういじまへ
居ね(ぞ)津るもしじ御主も箱根らんむう
ていつて色船に乏を運流しなくつて一体夏分
言はもうどうせさればいい文なしよチエスト
人樽の居ある時は財すでに財
身の空なる時は悟りも悠んとまで用(ゐ)を秘
へら一念がごゐあるもの像でいさそうかつ也
ありなんりね北翁の本宗(派)を訪問するも
ますーさ大隠は都の中に隠れざりの今も
もうこうて包まるる山中に引きこもらなければ
悟りの真にいたらぬまいと君、御不通とも
ふ(ゝ)にもそんな心もんずにおやめて御座候は
仙気湯の美人(臍)裡にもバく隠る連う
むやう館へりくいり行て麻が暑れも笹へり
くがれい一緒れ既に其の味を知つて臨床の
御に浦山んと踊の浴ずる見いに見たらしくて
はれなすふて振りのあら程なぞうれ楽に浮かんで
なて居れなくい お愛相とめお寿ままお妻な想夏
お花お情おまーおやすおぬい皆さん(何かの)皮の
ぱら多町の中へりけバ南側がとろがつて居る
と見るの見同きもせぬのみ(ウツヽにこの中のおますが 眼けて居るるが……)

[illegible]ねとめおけまおもなおなる夏
おれ花おわ清おおず　おわすおわぬ皆見人間の皮
ぜんぜん多所の中へわけバ南仏ところづつて居る
自然見合まもせぬのみ（暗がりで居る者がここ）（ここの中のおますぐ）
今金持ちの家の持ちけるい（知るまい）
あでかまでか　黙をを[illegible]（おのれ
るの二花瓶を[illegible]　男をとけうの
ち復雑な所　弱るるるな　花瓶
るもいあり　金の蔓い暗み　ふさ（見舞
けれバ何所でもわるのものい　なんでばる
濃蔓の解信でおとおいてがうを[illegible]
静宮氏方所すいまぐ見まいイヤ

ヤア〜[illegible]ぬる落させ泣ふい平家の[illegible]
時と見安ケ　拳るまさ[illegible]の一も敵る居る
[illegible]せ泣ふおり　[illegible]て勝負あれ所
中　[illegible]武義の西の位　底の鉢の股頭
すまないの二ツ直さね　ケりオーイ
連のどのこの金こちへ　使て[illegible]連の
びつくりぎようて　いへ　金でい見
せいません　傷ぞ[illegible]が　用を[illegible]の
るぎりっぺ　どれ　おそへ　まんで　ます　よ
やれ〜しぶと連の奴が　掛け掛け　行の
[illegible]せ　[illegible]りき　命と金とをみちの
ゐ[illegible]　連の[illegible]　[illegible]

昔法師へ下り立ちる

温泉のめぐりあさしめがあればとて
角を頭いまるくなるまで

鼻太伯へ遣す
山畑の芋をこそ大きくれ
茯苓を嗅て夢を引張る

親人に居なかと名を知る
山雲やりもあり

そこなえ

[illegible]太仙人道[illegible]
山畑の[illegible]の[illegible]鳥[illegible]こそ大きなれ
茯苓を嗅て夢を引張る
親人[illegible]名を知る
山[illegible]もあり[illegible]
十りの本言

神田の市信
[illegible]
[illegible]

花廊[illegible]

[illegible]トンとナ又字は八里の山沐[illegible]
[illegible]

[illegible]師
[illegible]南[illegible]陀佛

箱根の麓へ至りて張り上せられ瀧之介
其法印の身代り不動とて拠る事敷
なき境界の句

孤丁越へし月三更

身を浸み
と覚え旅寝の草枕
頼もしの身に見えぬ気色の草と芭蕉
の様な物をぬ恋やよみ士男誰
東方の明星一向に顕して明日
此の気寄に満て月を覚まし例め
坂條八竜乃楼に明を休め
塔の峯の満月明けし坂呼て吟

魂冷や
嘆まりまんまんまんまる子
　　　　　　　　　　　　　　　　月

桃へ身残思ひの
誰

誠冷やり
〳〵嘗よりまんまんまるな　みち月
桃へ金銭思召の通難有拝見仕候
西玉寒う川ヘ　并に右金子の内為替膝
之上京其後飛脚
是またもあきれ
あれは寒のあまりあまずに二寸五分の
汁也巨細は以紙
津分　金弐両弐分一朱
残金の　三両壱分　金壱両弐朱五匁余り
思案分二両の内　金拾八匁
〆て残り　煙草代　二両の内　金七拾二匁余り
拝見合料　金拾九両八拾六匁七厘五毛
総計金弐拾四両七拾二匁七厘五毛
内弐拾四両拂残金
金四両七拾二匁七厘五毛

十月十六日

中村忠度

[illegible]

再び之を閲
するに文章武を主とし
格の如き如何ぞ
すべきや
只々讀書を書き不て
年暮れ時杉邊に
如鶴の三千四百年
例の如く大の表に
後前の井を今て
深く不可忘諸葛志

作品前の井戸のみ合て
深的不可思議夢志
想の言葉を百まで
謹んで画師の妻を讀
感歎謹ずず評して曰く
字句皆金玉句句皆精
練渾成の一章を象
牙を擦るごとく点睛
なるごとく百言の料理を
利休の作るごとく
三昧の情を盡して情神
を審美の精妙一遍
辞へるごとく二三遍して
味あるごとく三三遍して
薬を折つて

辞へるごとく二度三度
罵めしるごとく三度
寧ろ折て
情しうし
男の理想家那なる忠義
を知る男の所〳〵と
意を解しき
和三十四年三月三日
於て
謹言する中
讀書する中
少時誠に
匪軍所〳〵の
寄る蠶蠶
空呼
我が
迷ひ
横ち

遊眉の多を亡而て
横手所の仲人と共謂る
所ゞ世辭ま有ほゞ立
勝と勝と勝との感歎すら
有る一対の如し
嘆呼こゝ感ず庶幾
樓ろ凡思ふまゝ
多一面を遺へ
如之

三月十日於西邑
中都庵
[illegible]

覺善法師之

中尾間所ノ取締ハ
義渡穴ヲ作リ踏み
出ス者ハ逆賊中ノ罪
軍ニ対スル如ク前ハ六人
ヲ仮ニ如キ抜ケ
ぐるまの別ハ家邊へ
帰れハ必ず人ヲ遣ハ
あるハ幡言ハ如キ事
犯人ヲ言ハ出ス者ハ
ハ幡ヲ山主ヲ友ノ
ハ使ハ今回の雑

八幡宮ノ山王社ニ有之候
ハ、
其儀ハ今回ノ雖
一件ハ江戸ニ有之候
聖人ニ有之候ハ、言ハ無積
の家ニ有之候弱年の者ハ
刀剣鉄砲ハ揃り不申候
有之候、
時ハ前の痛ニ相成候
ハ、言書ニ有之
ハ、の鍋の用ハ
青月の鍋の用ハ
有之候ハ、
悪ク相成
御罷ハ、
ハ、
此加賀の一ハ
連中の腸ハ
ズーンと考

連中の腸は陽と陽と
ズーンと考えみて
居る人多く
決闘の事中に番神前
見掛けない痩せた男を
いきなり抜刀
なる程決闘なるべし
小さな二尺八寸の大段平
五寸二分の短銃なる
こゝ大きの頭を
世にこゝの腸まで
出来る宣敵
お頭の命令に
こゝで義
痩畢世の
勇士を
鎗の内
武異い郎

一
鎗ハ今様の内にも之なし
武具ハ邪魔なる也いらぬ
とんと捨て候の積合へ
かつぽれと云の奴の法闘すハ
始り候て一分備へいもし
是非借をと頼み兵粮はせ
わきまへわりげを頼み給ん
はなはだまゝ不確申なれ共
ちと書面へ向け兵糧催
促申上候早々御返事ニ而
書面ながら十一月二日

日々
鎌次

花渡

何信

深者大作者
諸人ちと待く
序ゆ
ちゝ序ゆ

[illegible]者[illegible]
[illegible]人[illegible]
粋の大粋の
[illegible]の大[illegible]（決して[illegible]ものの事）
[illegible]

二伸　[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
好男[illegible]
[illegible]男[illegible]
[illegible]
[illegible]